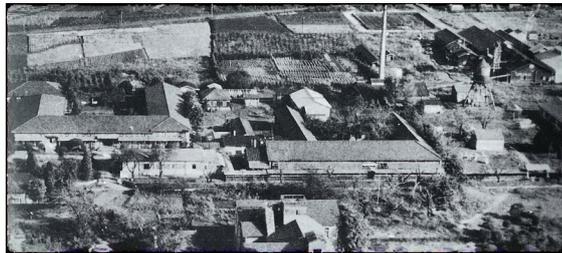


# 第3章：東京医科大学茨城医療センター72年、霞ヶ浦看護専門学校46年の歩み

茨城県南東部に広がる日本で二番目に大きい湖の霞ヶ浦を臨む地で、本学の附属病院として、72年にわたり地域の基幹病院として役割を果たしてきた茨城医療センター（旧霞ヶ浦病院）そして、本学3附属病院および地域の看護の一翼を担っている霞ヶ浦看護専門学校の歩みをご紹介します。

### ■霞ヶ浦病院設立のきっかけ

東京医科大学は、大正5（1916）年に新宿の地に東京医学講習所として開設され、大正7（1918）年に東京医学専門学校に、昭和21（1946）年に大学に昇格して東京医科大学となりました。しかし、昭和22（1947）年に学校教育法が制定され、本学では新制医科大学として再発足するにあたり病床数不足が問題になりました。そのような中、初代学長で第三代理事長であった緒方知三郎氏（日本の近代医学の祖・緒方洪庵の孫、文化勲章受章）のもとに、茨城県稲敷郡阿見町にある茨城県厚生農業組合連合会新治協同病院（現総合病院土浦協同病院）阿見分院の経営に携わっていた友人から移譲したいとの申し出があったため、これを買収して昭和24（1949）年10月1日、東京医科大学霞ヶ浦病院が開設されました。病院の敷地は戦前、旧海軍霞ヶ浦航空隊の医務室でした。



昭24（1949）年10月 開設当時の霞ヶ浦病院全景

### ■新制 東京医科大学が認可される

霞ヶ浦病院開設時の病床数は55床、医師は院長の高橋不二彦氏と医員2名の3名でした。以後、徐々に増床していった結果、病床数が大学の設置基準に達したため、昭和27（1952）年2月、新制の東京医科大学が認可されました。

当時の我が国は、結核の早期発見と治療が叫ばれていた時代で、全国的に結核病床が不足していたこともあり、霞ヶ浦病院は主として結核療養所としての性格を持ち、昭和28（1953）年には230床となり、茨城県における主要結核療養所の一つになりました。その後、昭和31（1956）年から昭和33（1958）年にかけて結核患者の減少に伴い、一般病棟に切り替えていきました。

### ■施設の充実を図り総合病院へ

昭和40（1965）年代以降、急速に施設の充実を図り、昭和43（1968）年3月、旧海軍霞ヶ浦航空隊医務室の木造に代わって鉄筋コンクリート造の外来診療棟と管理研究棟が完成しました。昭和44（1969）年医員宿舎、昭和46

（1971）年に入ると、中央手術室改築、3つの病棟の拡張工事、医員宿舎増築、教育研究棟・女子学生寮・学生寮の落成、中央検査科設置、図書室整備など次々と施設が拡充され、診療科目も一挙に多数新設されました。これにより、昭和47（1972）年9月、茨城県より総合病院としての承認を受けました。

その後、昭和52（1977）年 南病棟（臓器別病棟）、昭和56（1981）年 中央病棟、昭和62（1987）年 健診センター一棟、平成元（1989）年 外来本館棟、平成9（1997）年 東館病棟、平成14（2002）年 医療・福祉研究センターが完成するなど拡大していきました。



昭和62（1987）年12月  
健診センター棟（右）、南病棟（左）



平成9（1997）年12月  
外来本館棟（左）、東館病棟（右）



平成14（2002）年1月  
医療・福祉研究センター

### ■病院名を茨城医療センターに改称

平成21（2009）年4月、創立60周年を機に、県を代表する臨床病院・医育機関として発展していくことを念頭に、病院名を霞ヶ浦病院から「茨城医療センター」に改称しました。特に、救急医療ならびにがん診療、高齢者医療などを積極的に推進し、地域の基幹病院としての役割を果たしています。

